

「まことのぶどうの木」(ヨハネ 15:1~10)

1 節で、イエスは「私はぶどうの木であり、父なる神さまが農夫である」と言ったと記されています。「わたしは～である」というこの福音書の特色ある言葉は、イエスはどのような方であるかを明らかにすると共に、著者の属する共同体の信仰告白でもあるのです。神の民であり、神さまの祝福を継承することが出来るものと信じていたイスラエルの人たちに対して、著者は「まことのぶどうの木」はイエスであり、このイエスにしっかりと繋がっている者だけが枝の恵みに与るのであって、イスラエル民族であることが救いの条件になるのではない、と言っているのです。

今日の箇所「つながる」という語が9回用いられています。この言葉は元々は、「留まる」とか「宿る」という意味を含む言葉で、著者は「互いが互いの内に留まる」という表現で、両者の深い交わりを表しています。ぶどうの枝が幹から養分を豊かに受け、枝が伸び、実を結ぶように、イエスにしっかりと結びついて、そこから生命を受け、生命の実を豊かに結ぶことが求められているのです。著者の属する共同体はユダヤ教正統派により会堂から追放され、厳しく対立するという状況にあり、多くの人たちが共同体から離れていきました。このような危機に直面してもなお、イエスをキリストと告白し、イエスを神と等しい者と信じるものは「豊かに実を結ぶようになる」と記すのです。

ここで注意したいことは、「わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝」と言われていることです。イエスとつながっているかどうかということと共に、実を結んでいるかどうかということが重要なことなのです。2節の言葉は、繋がらない者への厳しい裁きの言葉を語るだけではなく、キリスト者には慰めに満ちた励ましの言葉になりました。3節の「わたしの話した言葉」は単数形であり、十字架の死と復活を含むイエスの出来事全体、「福音」を意味します。その言葉に自分を投げ入れることによって、あなたがたは神さまに属する者とされている、と言うのです。信仰とは神さまと人間との生きた関係であり、「あなたがたはわたしに繋がる枝である」と宣言するイエスが、同時に「わたしにつながって生きよ」と、招いているのです。その意味では、信仰は静的な受動的なものではなく、私たちが自分自身の全てを投げ入れる決断であると言えるのではないのでしょうか。著者は、あなたは本当にイエスの内に留まり、その愛の内に生きるのか、と共同体の人たちに問いかけているのです。「わたしにつながっていなさい」というイエスの言葉は、あなたは私の内に留まり、イエスにあって生きなさいという招きの言葉です。この言葉を聞き、神さまによって生かされ、豊かな実を結ぶ歩みを生きたいと思うのです。